常磐東小学校　校長だより

常なる磐

つねなる　いわ　seasonⅡ

令和３年 12 月 23 日(木)
2021 しめくくり号　その２

◇ 聞き手を意識し、思いを語る

１学期終業式

本校の児童は人前に立つことを苦にしない。６年ともなると本当に堂々としている。大したものだ。理由は明確。「経験の積み重ね」これが大きい。

小規模校であるがゆえ、低学年の時期から人前に立ち、話をする機会は他校よりもはるかに多い。
例えば、終業式での「〇学期の反省とこれからの目標」。低・中・高学年を代表して決意を述べる。

あらかじめ準備した原稿を手に、まずは舞台袖に待機。ふつうは、これだけで緊張するものだ。
紹介を受けて壇上に上がる。自分に向けられた視線を感じ、気持ちは引き締まるが、鼓動の高まりとともに緊張の度合いは加速していく。
これもふつうだが、本校の子供たちの感覚は、これとは少し異なる。

壇上の自分に向けられた顔を見ると、勝手知ったるなじみの顔ばかり。それどころか知らない子は誰一人いない。小さなコミュニティが自分への応援となる。

椅子に腰掛ける姿勢も立派だ。しっかりできるのは、先輩たちの姿からの習いであり、加えて目の前に座る友達の温かな視線が、背筋をいっそう伸ばさせる。
ふつうはより一層体に力が入って硬くなり、緊張が増すものだが、本校の児童はいい緊張感をもちつつ、自分が話す順番を待つ。

令和２年度 修了式

しかし、物足らなさもある。準備した作文を読む点だ。聞き手が語り手をしっかり見てくれているなら、語り手は聞き手を意識するのが大事。

聞き手を見ながら話ができるのが理想なのだ。
自分の語りで伝えることもできそうなのだ。

そこで始めたことがある。一斉下校での児童のスピーチ＝語りである。

「語る内容は自分で考える。話したいことを話せばよい」としたが、スタートの６年生が【自分のあたりまえ】でスピーチをしたことから、流れが受け継がれる。
『僕のあたりまえは「早寝早起き」です。……皆さんも早寝早起きをしましょう。』
こんな感じである。
嬉しいのは、自分のことを語るだけでなく、他の子に呼び掛けている点だ。ここに【聞き手を意識する】語り手の思いがある。

一斉下校スピーチ　立候補の３年生　Ｓ之助さん　Ｍ希さん　Ｆ十丸さん

６年生から開始し、５・４年生を経て、現在は３年生の出番だが、４年生に出番が移る時に「やりたい人？」と募ってみた。すると、ぱぱぱっと手が挙がる。
Ｋ葉さんとＪ奈さんだ。二人の行動には正直驚き、そして嬉しかった。

二人はどちらかと言えば、控えめなタイプ。元気のある男子が流れを作るだろうという私の予想を覆す。それまでスピーチを行ってきた５・６年生がよい流れを作ってくれたおかげもあるが、彼女らの「伝えたい」「語りたい」という思いの強さと、「皆が聞いてくれる」という空気感、安心感があればこそだ。そして二人の小さな勇気ある行動が、さらによい流れを太く、大きくしていく。

終業式スピーチは原稿のない語り。繋がり繋げた語りが令和３年を締めくくる。